

報告タイトル

韓国の記憶の政治と当事者性の形成
The Politics of Memory and the Formation of Historical Stakeholdership in South Korea

氏名（所属）

米沢竜也（神戸大学）
Tatsuya Maisawa (Kobe University)

要旨（800字程度）

集合的記憶研究では、国家がいかにして歴史を国民的記憶として構築し、維持していくのかが論じられてきた。しかし、ある歴史が国民的記憶として定着する過程では、誰がそれを自らの歴史として語り、守り、継承する資格を持つのかという「当事者性」の形成も見過ごせない条件である。当事者性は、歴史の意味を枠づけ、それを代表して語り、国家や社会に働きかける資格そのものを規定する。しかし、この当事者性がどのような根拠から形成され、その違いが記憶の政治にいかなる帰結をもたらすのかは、これまで十分に比較検討されてこなかった。

本報告では、韓国の独立運動、独島をめぐる活動、東学農民戦争の記念という三つの事例から、当事者性の形成根拠とその差異が記憶の政治に及ぼす作用を比較する。独立運動では、国家が自らの正統性の基盤として独立運動の継承を制度化した結果、当事者は国家によって公認された地位を獲得し、むしろ国家を拘束しうる権威を持つに至った。対して独島問題においては、当初「独島を守る」ことは、現地での定住や警備など一部の者にしかできない行為であった。しかし2000年代以降、広報や教育への参加も「守る」実践とみなされるようになり、実践への参加を通じて当事者性を獲得しうる構造が生まれた。東学農民戦争はこれらとは異なり、各地で異なる主体によって継承され、参加者の特定も困難になっていることから、当事者性が特定の主体に収斂せず、複数の主体が異なる根拠から当事者性を形成し、併存している。

以上の比較を通じて、本報告は、国民的記憶の形成とは、国家が歴史を制度化する過程のみならず、歴史との接続を主張しうる主体が形成される政治的過程でもあることを示す。そして、当事者性は国家との関係のなかで形成・再編されるものであり、その形成過程の差異が記憶の政治のあり方を左右することを明らかにする。